

『中辺分別論』 安慧釈における 所知障についての一考察

松 下 俊 英

はじめに 『中辺分別論』 (*Madhyāntavibhāgabhāṣya*) を註釈する安慧は『中辺分別論釈疏』 (*Madhyāntavibhāgaṭīkā*: MAVṬ) において、菩薩にとっての障礙である所知障を解釈する際に所知障の「所知は五明処である」と述べる。五明処については『瑜伽師地論』「菩薩地」 (*Bodhisattvabhūmi*: BBh) において、一切智者を得るという自利が示され、さらに「衆生の利益のため五明処を探求し善巧になる」という利他が提示されている。

安慧は MAVṬ において所知障の「所知は五明処である」と解釈するが、所知障の障礙については『大乘莊嚴經論』 (*Mahāyānasūtrālamkāra*: MSA) 安慧釈 (*Sūtrālamkāra-vṛttibhāṣya*: SAVBh) において「所取・能取に対する執着が所知障である」とする。さらに所取・能取に対する執着を断じるための過程として無分別智と後得世間智とを修習し、菩薩は一切智者を目指すと解説している。安慧はこの二つの智のうち、後得世間智は「衆生に法を説くなどして衆生の利益のため修習する」と示す。

このことから、そもそも五明処には「衆生の利益のために善巧になること」という菩薩の課題が示されており、所知障を断じるための後得世間智にも、「衆生の利益」という菩薩の課題が示される。両者には菩薩にとって共通の課題があることがわかる。すなわち「所知障」と「五明処」とは菩薩にとっての課題の共通性があるということから、MAVṬ において「所知は五明処である」と安慧は説示したと確認できる。

1. 五明処について 安慧は MAVṬ 第 2 章において所知は五明処であることを意図して MSA 第 11 章第 60 偈を引用し、MAVṬ 第 3 章では明確に所知障の「所知は五明処である」と解釈する。第 2 章に引用された MSA は五明処についてのみ語られた偈であることは世親釈によって明らかである。また、MSA 第 11 章に平行する BBh「力種姓品」においても所知障と五明処との関係は語られず、以下の記述がなされる。

そして、以上の五明処すべてを菩薩は無上等正覚の偉大な智資糧を円満にするために探

(114) 『中辺分別論』 安慧釈における所知障についての一考察 (松 下)

求する。というのは、一切に対して以上のように、順次に巧みでないものは、障りのない一切智を得ないからである。まず、菩薩は何を探求し、どのように探求し、何のために探求するか、それが説かれた。BBh [pp.105.25-106.4]

以上の記述から、菩薩が五明処を探求する理由は無上等正覚の智資糧を満たすためであり、もし一切の明処に対して善巧でないなら、一切智すなわち仏になることを得ないということが理解できる。さらに BBh 「真実品」では、五明処について「〔菩薩は〕一切の明処において、善巧となる。また衆生の疑惑を断じ、利益を与えるため、また自己の一切智の因を取得するため¹⁾」と説示される。つまり五明処は一切智者を得るという点で自利を示し、衆生に利益を与えるという点で利他を示していることがわかる²⁾。

2. 所知障について 安慧は、所知障の「所知は五明処である」としていたが、所知障の障礙については SAVBh において「所取・能取に対する執着である」と解釈している。さらに所取・能取の断滅については修行階梯に合わせて解釈をなしている。

MSA 第6章では、瑜伽行派の五道についての説示がなされる。その中で、第7偈について、安慧は「見道において法界が現前となることと、それから所取という障礙の相からも離れ、能取という障礙の相からも離れる。〔つまり〕二つを欠いた法界に住するという意味である³⁾」と述べる。このことから、見道においては「所取・能取が断じられる」ということが理解できる。しかし、見道においては、「所取・能取の断」としかいわれておらず、安慧が所知障として提示する「所取・能取に対する執着」の断については語られていない。

この後の「あらゆるところで、常に、知者の平等に付き従う無分別智の力によって、底深い過失が集まったかの依り所は取り除かれる。偉大な薬が毒を取り除く如く⁴⁾」と語られる第9偈に至って「所取・能取に対する執着」をも断じることが示される。安慧は、偈の「常に」ということについて「二地から十地まで継続して障礙を断じる⁵⁾」と述べる。二地から十地は、菩薩の修道という階梯にあたる。すなわち見道なる初地を超えて第二地からは、修道における障礙を繰り返し反復して断じていく過程なのである。

以上のことは、SAVBh 第14章において、菩薩の十地のうち第二地から第十地を修道とし、「それらの修道においてその菩薩は修所断の煩惱障と所知障を断ずるために修習に専念する⁶⁾」と述べられることから確認できる。さらに、この第14章の説示の直後には無分別智と後得世間智を修習することが説かれる。二

つの智のうち、無分別智によって自己を成熟させるといわれ⁷⁾、自利が示される。一方、後得世間智によって「衆生を成熟させる」と安慧は解釈する。以下、後得世間智の記述を確認しよう。

3. 後得世間智について 上に見てきた第14章では、引き続き無分別智と後得世間智についての解釈がなされる。二つの智のうち、後得世間智について安慧は以下の註釈をなす。

「他方は〔法の〕設定に応じて衆生を成熟させるものである」(XIV.43cd) という場合、「他方」というのは第二の智という意味である。第二の智は分別智であり、この智によって十地それぞれの相や功德など別法のみを別々に立て区分する。それは何かと言えば、出世間の無分別智の後に得られる清浄世間智である。それによって、衆生に法を説いたり現等覚などを示すことによって、衆生を成熟させるのである。SAVBh [P312b8-313a3; D279b5-7]

さらにこの後に続く第46偈では、「一切種智、すなわちこの上ない境地を得て、そこに住し、一切の衆生の利益のため修行する⁸⁾」と語られる。「そこ」とは無分別智を指すが、安慧は「そこに住して一切の衆生を利益し幸福にするため、清浄世間智によって現等覚や降魔、転法輪、涅槃を示すことなどを修行する⁹⁾」と註釈している。

すなわち見道において一旦所取・能取を断じ、引き続き修道において二つの智によって所取・能取に対する執着をも断じてゆく。その目的はもちろん「仏になるため」といえるが、二つの智のうちの後得世間智によって「衆生に利益をなすため」という菩薩の課題があると理解できる。

先に、BBhにおいて菩薩が五明処を探求し善巧になる理由が説かれていることを確認した。BBhでは一切智者を得るという点で自利が示され、さらに「衆生の疑惑を断じるため、利益を与えるため」といわれ、菩薩にとっての課題である利他を提示していた。つまり、後得世間智を修習することと、五明処を探求し善巧になることとは、利他行という菩薩の課題という点で共通している。

おわりに 以上、安慧は所知障の所知は五明処であると解釈していた。その五明処はBBhにおいて一切智者を得るという自利と、「衆生の利益のため、五明処を探求し善巧となる」という菩薩の課題である利他が示されていた。

さらに、安慧は所知障の障礙は「所取・能取に対する執着」と解釈し、見道において所取・能取を一旦断じるが、次の修道において無分別智と後得世間智とによって繰り返し障礙を断じていく過程が説かれていた。無分別智は自己の悟りのためであり、後得世間智は、法を説き衆生を成熟させるためであり、利他という

(116) 『中辺分別論』 安慧釈における所知障についての一考察 (松 下)

菩薩の課題が示されていることがわかった。以上のことから、「五明処を探求し善巧になること」と「後得世間智を修習すること」とは、菩薩にとっての共通の課題であると理解できた。

以上、「所知障を断じること」と、「五明処に善巧になること」との両者は、「衆生に利益を与える」という菩薩にとっての課題が共通するものであるということから、安慧は所知障の所知は五明処であると説示するに至ったのである。

-
- 1) BBh [pp.42.27-43.1] 2) BBh に説かれる五明処と菩薩の関係を考察した論文に小沢憲珠「菩薩と五明処—瑜伽論を中心として—」(『大正大学研究紀要』65. 小沢[1980])がある。小沢[1980]は、BBhにおいて菩薩の慧の自性は五明処であると解釈されることを提示し、その慧は世間・出世間の慧でもあるから、勝義・世俗が五明処に含まれることを論証する。勝義・世俗の五明処を探求し修習することは、本論で述べるように第二地以上の菩薩が所取・能取に対する執着を断じていく際に無分別智と後得世間智を修習することと一致する。すなわち勝義なる無分別智によって一切智者を得るという自利を示し、世俗である後得世間智によって衆生に利益をなすという利他を示している。このような共通性から安慧は「所知は五明処である」と述べたといえる。一方、所知障の障礙は「所取・能取に対する執着」と示されることから、それへの執着が五明処をさまたげるということになる。その点は現段階では理解しがたく、今後の検討を要する。また、小沢[1980]が「なぜ五明処を導入しなければならなかったのか」と述べるように、なぜ五明処が第二地以上の菩薩に課せられるかという疑問が未だに残る。以上の二点は今後の課題としたい。
- 3) SAVBh [P91a5-7; D79b7-80a2] 4) MSA [p.24.5-6] 5) SAVBh [P91b8; D80b1] 6) SAVBh [P312b5-4; D279b3-4] 7) SAVBh [P312b6-8; D279b4-5] 8) MSA [p.96.15-16] 9) SAVBh [P314a1-3; D280b3-5]

略号 BBh: Wogihara ed.; MAVT: Yamaguchi ed.; MSA: Lévi ed.; SAVBh: sDe dge edition No.4034. Peking edition No.5531.

〈キーワード〉 所知障, 所取, 能取, 五明処, 安慧, 後得智

(大谷大学大学院)